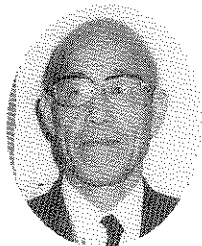


第V章 創設期の思い出

工技センター5周年にあたって



鹿児島県工業技術センター
創設5周年を迎えられ、謹ん

でお祝いを申し上げます。この5年間はスタートアップの時期、県内各界の期待に応じて数々の優れた業績を積んでこられた各位のご努力に心からの敬意を捧げます。

昭和60年4月から3年半、セラミックや焼酎に関するビッグプロジェクトなどいろいろな事業に皆さんの協力のもとに取り組み、忙しい毎日ではありましたが、産業界の方々との協力により多くの立派な研究成果があげられたことを大変嬉しく思いました。

また、そのとき作られた研究会が今も活発に活動されているとのこと、ご同慶の至りに存じます。

昭和62年の秋、職員の皆さんの昼夜にわたる努力のお蔭で移籍が完了し、その12月1日に鎌田知事をお迎えして無事開所のはこびとなったときはホッと致しました。

工業技術センターになって3所の各部が一緒にになり、電子部、デザイン開発室、企画情報室が新設され、さらに鹿児島県工業会の事務所も設けられて、にわかに産官共同の拠点に相応しい形となったわけですが、9カ月の間何の力にもなり得ず申し訳なく思いました。しかし、その後御鹿児島県工業倶楽部に発展されて大変嬉しく存じます。

工業技術センターでは、暇を見ては展示室を覗いて陳列品を眺め、研究室にいてはいろいろ教えてもらったことを思い出します。これには見学にとられた方々に少しでもよく説明したいという

(株)つくば研究支援センター
常務取締役 竹盛欣男

本音もあったわけですが、私自身にとっても鹿児島の産業の勉強になり大変楽しい場でありました。

研究であれ何であれ、日々の積み重ねが大切であることは言うまでもありませんが、常に先を夢見て前進してこそ成長があるのでしょうか。鹿児島の産業をリードする工技センターとしていつまでも若々しい研究所であることを念じて止みません。

職員の皆様の益々のご健勝とご活躍、並びに工技センターの一層の発展を心からご祈念申し上げます。

【メモ】

昭和60年 4月：工業試験場長

(化学技術研究所から)

昭和62年12月：工業技術センター所長

昭和63年 8月：四国工業技術試験所へ転出

平成元年 4月：現職

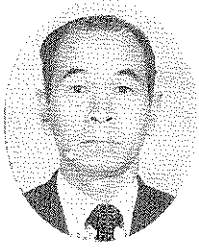
(株)つくば研究支援センター)

現住所：〒305

つくば市二の宮三丁目25-2

現況：最近、愛妻のキャディーを努めています。

緊張と多忙の四ヶ月



工業技術センター設立5周年記念誌に寄稿の栄を賜り、

誠に恐縮に存じます。

振り返りますと、県在職期間満40年間のうち、センターの在職期間は、センター開所の日から四ヶ月でありましたが、誰も経験しない体験をしたことは、私の生涯の中で最も記憶に残る期間になるでしょう。

昭和62年12月1日は、センター開設の日で、当日午後2時から、知事を始め関係者多数の出席のうえ、開所式が実施されました。私ども職員は、旧所属からセンターへの転勤発令も同日付けで、辞令交付は同日午前中センターで知事から直接受けた後、新しい機構について、知事を囲み昼食懇談会が実施され、各部所の機能、役割や抱負等について、それぞれの担当責任者と忌憚のない意見交換が開所式直前まで実施されましたが、知事の当センターに対する期待の大きさと、我々職員の職責の重大さを改めて実感いたしました。

JR日豊本線沿いの田園の中に立つ建物の外観と、センターの名称から、イメージとしては、当初は、文化施設と思われたのではないのでしょうか。開所の日から各種団体や一般の方々から、平日は勿論、土曜、日曜日を問わず、見学や照会が、日を追うごとに増加し、その対応に追われる毎日でもありました。

センターの設立を対外に披露する行事である落成式典は、昭和63年1月30日通産大臣を始め各省庁の関係者及び県選出の国会議員並びに県内外の関係機関、各種団体等273名のご臨席のもと、厳粛

県消費生活センター

相談員 原 口 昭 雄

の中にも盛大に施行され、無事終了したときは、当日に備え、開所の日から、運営スケジュール、具体的シナリオの作成やリハーサルの実施などで徹夜したことなどが走馬燈のように甦り感無量でした。式典に引き続き、センターのシンボルであるメビウスの帯の除幕式が実施されました。除幕と同時に花火の打ち上げを、私の独断と偏見で、当日まで、式典進行係の数人しか知らされず実行いたしました。その響きは式典のフィナーレにふさわしいものであったと、今でも自負している次第です。

その後も雑事に明け暮れる毎日でしたが、所長を始め職員皆さんの暖かいご指導とご協力に感謝しつつ退職の日を迎えました。

最後に、工業技術センターが名実ともに、本県の中小企業などの技術開発、技術力の向上を支援する中核的施設として益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

【メモ】

昭和63年 3月退職：庶務部長

(昭和62年12月～昭和63年 3月)

昭和63年 4月～：県消費生活センター相談員

現 住 所：〒890

鹿児島市南郡元町29-4

現 況：工技センターのゴルフコンペに参加させてもらっていません。

「出藍の誉れ」がいまだにいません。残念です。

回 想



日本地下石油備蓄株式会社
串木野事業所 武 弥八郎

早くも工業技術センター創立5周年を迎えられ心からお喜び申し上げます。

また、発足後間もない期間に木材・窯業・食品などの各部門において、数々の研究成果をテレビ、新聞などで拝見する度に在職した者として大きな誇りを感じております。

これは一重に所長さんを始め全ての研究員の方々の意欲と絶え間ぬ努力の成果であると深く敬意を表したいと思います。

さて、私がこの工業技術センターに勤務したのは昭和63年4月から平成元年三月までの一年間でありました。思い起こしますとここに勤務を命ぜられたときは、正直なところびっくりし、一抹の不安を感じたものです。

と言いますのも、落成式に出席の機会を得、当時の鎌田要人知事が厳しい財政事情の中から約六十億円を投じて、本県商工業振興の拠点となるよう願いを込めて建設されたことを聞いたときここに勤務する職員の方々は、今後様々な責任を担うこととなりさぞかし大変だろうと考えていた矢先でした。このような事から全く身の引き締まる思いで赴任したものです。赴任にあたっては、この工業技術センターは三研究機関が整備統合され、それぞれの機関はその職場の伝統、習慣、雰囲気の違いの異なった者の集合体であることなどを考えながら、先づ第一に職員間の融和を図る事を念頭に赴任したのですが、その心配は見事に外れ、全職員紳士の方達ばかりで安心したものです。

赴任したときは、落成式等のセレモニーは既に終っており、前任の原口庶務部長さんなど全職員の方々が、引越から開所まで大変ご苦労されたと聞き身の細まる思いでした。担当しました庶務部

は、庁舎管理、メンテナンス業務、引継書類、備品の整理、各種の契約業務、備品購入の入札執行消費税導入後の使用料、手数料の改定事務、加えて電話交換業務など多種多様でありましたが、骨身を惜まず適確に業務を処理し、私を助けて下さった横山、修行、塩福、増山、原の各スタッフのみなさんには、ひたすら感謝するのみです。

また何時の日か実現するであろうことを期待しながらの増員要求や、どんなものかもわからないままに派遣研究、客員研究制度の予算要求をしたこと、隼人町の田園に囲まれ、素晴らしい環境のもとで皆様方と仕事が出来た事などやあれやこれや思い浮かべながら回想の一端を記しました。私にとっては最後の一年間でありましたが、最後まで温かくお付き合い頂きご支援ご協力を賜った皆様方に対し厚くお礼を申し上げます。

最後になりましたが皆様方のご多幸と工業技術センターが次の世紀に向かって大飛躍される事を祈念してやみません。

末筆で恐縮ですが、元デザイン開発室長田原健次様のご冥福をお祈り致します。

【メモ】

平成元年3月退職：庶務部長

(昭和63年4月～平成元年3月)

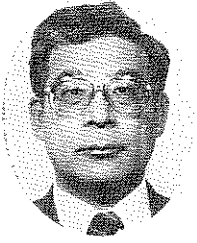
平成元年9月～：日本地下備蓄株式会社串木野事業所

現住所：〒892

鹿児島市上竜尾町5-34

現況：今年1月10日に串木野事業所の地下タンクに待望のオイルインをいたしました。私は、毎晩焼酎インして頑張っています。

創設期の思い出



光陰矢の如し、もう5周年を迎えたのかと驚くばかり

です。

さて、工技センターの発足から3年間、新設の電子部を担当した者として、その思い出を述べさせていただきます。

昭和62年11月29日、福岡のNTT九州ネットワーク支社に在任中、突然に鹿児島県庁への出向の内示を受け、何をするのか要領を得ぬまま12月1日に電子専門監として着任しました。

着任時は永吉研究員が唯一人で計測機器類の購入や研究テーマの準備等に当たっていました。その後、久保研究員が加わり3名で船出しました。

1月までは創立セレモニーやパンフレット作成作業等に追われ、気がつくと63年度は目前に迫っていました。新年度のテーマを決めなければなりません。鹿工技ニュースNo.1を見直しますと、4テーマを掲げています。しかし3名ではとても荷が重いということで、4月に増員することになり、小正研究員がメンバーに加わりました。これで4テーマを分担し、実質的なスタートを切りました。

工技センターの役割は、研究と技術指導に大別できます。電子部は研究体制確立を第1とし、研究員には研究業務に専念できるよう対外的なことは努めて私が引き受けるようにしました。こうして1年目が終わる頃には体制もほぼ固まり、県内の関連企業調査を集中的に行うことにし、リストアップ、訪問調査をし資料として整理し毎年更新するようにしました。この結果、県内の状況が把握でき、研究→指導→研究のサイクルが機能する

NTT九州支社

九州技術開発センター 松永哲正

ようになりました。

2年目は内容充実を目標とし、各研究員に年1回の成果発表を義務付けました。

また、ぜひ実現したいと考えていましたLAN応用による所内OA化も実施し、現在も継続発展しています。研究員交代（小正研究員→尾前研究員）もありました。

3年目は引継ぎを考え、可能な限り業務を研究員に分担しました。

仕事以外では、テニス、ゴルフ、天文館等まさによく遊べの連続でした。民間からの出向ながら、何の違和感もなくおつき合いいただき、楽しく充実した3年間で、何とか電子部の方向付けもできたかなと思っています。

最後に、工技センターのますますのご発展をお祈り申し上げます。

【メモ】

平成 3年 1月31日退職：電子専門監

(昭和62年12月～平成 3年 1月)

平成 3年 2月～

NTT九州支社

九州技術開発センター総括担当課長

現住所：〒862

熊本市御領1丁目10-30-125

現況：当技術開発センターは九州ブロックの業務運営上の技術的改善や商品開発部門で約50名で構成されています。私は当センターの全体的調整を担当しています。相変わらず元気です！

メビウスの旗



サツマ化工株式会社

松久保 好太郎

工技センターを初めて訪問する人が、まず目にするのが、正面のモニュメント「メビウス'88」であろう。

私はメビウスが何のことかわからず、百科事典で調べてみた。数字の8をほぐしたような形をしているが、あの表裏のない、局面は共形幾何学(反転幾何学)(位相幾何学)(Conformal geometry)という学問の対象で、長方形の紙を一度ねじって両端をはり合わせてできた帯を研究したドイツ天文学者で、数学者であった August Ferdinand Möbius (1790~1868) の名前をとってメビウスの帯(Möbius band)と呼ぶ。

細長く短札状にきった色紙などを使って、自分で作ってみると結構面白い。この帯を切って紙幅を半分にすると輪はさらにねじれるが、つながったままで、大きさは2倍になる。はみ幅などの条件が満たされれば、何回でも繰り返すことが可能で、輪の大きさは切るたびに大きくなる。難しいことは解らないが、工技センターの未来に期待し、伝統技術と先端技術の融和と技術の無限の可能性のテーマとして、このモニュメントを選ばれた発案者の意図が生かされるように願いたい。

工技センターの所旗をつくる話が出た時、私はこれを使うべきだと考え、手元にあった赤や緑など大きさの異なる何種類かの色紙を使ってメビウスの帯をつくり、折ったり、たたんだりしているうちに通産省工業技術院のマークに似た形ができたので、食品工業部案として所議に提案した。

現在、日の丸と県旗と並んで掲げられている工技センターの所旗は、この折紙を基にデザイン開

発室で配色や形を検討してできあがったものである。このマークは、所旗だけでなく、工業技術センターのシンボルマークとして、報告書やパンフレットなどにももっと活用して欲しいと思う。

【メモ】

平成 3年 3月退職：食品工業部長

(昭和62年12月~平成 3年 3月)

平成 3年 4月~ :退職

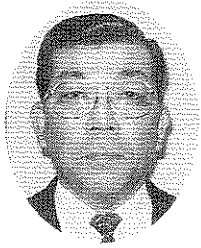
(サツマ化工株式会社)

現 住 所：〒890

鹿児島市下荒田三丁目20-17

現 況：自宅から往復90kmの加世田市にある会社に、毎日クエン酸製造、南薩地域の農産物を利用した加工食品づくりにマイカー通勤しています。

工業技術センター開館5周年に寄せて



鹿児島県農協指導監

岸本啓二

工業技術センター開館5周年を衷心からお祝い申し上げます。

この間、幾多の素晴らしい成果をあげられたものと存じます。

さて、私ごとですが、平成元年4月1日付人事異動の発表がある日に朝、土木部長室に呼ばれ、当時の土木部長から「あなたは今回の異動で工業技術センターの庶務部長との内示がありました。おめでとう。頑張ってください。」という異動内示があり、ありがとうございましたと応え、自席に帰ったものの、工業技術センターとはどんなところか、何処にあるのかさえも知りませんでした。

辞令を貰い工業技術センターに初めて参りまして、施設の大きさ、立派さに驚きましたが、以来2年大変お世話になりました。私の場合、開所1年5ヶ月目からほとんどレールが敷かれていたので大変助かった次第で創設時の関係者は大変ご苦労をされたらうと思います。

施設の視察や見学者が県外、県内、国外を問わず、毎日のように訪れ、多い日には3組も4組もが時間が重なり、その調整に苦慮したこと、特に空港と鹿児島との時間調整目的の飛び込み視察が多かった。また、休日に自治大臣の視察が入り、ゴルフコンペに参加できなかつたり、常陸宮殿下、同妃殿下のご視察が決まり、小会議室を俄造りで立派な休憩室に改装？するなど準備万端整えお待ち申しましたが、台風の影響で当日キャンセルとなってしまう大変ガッカリしたこと、ゴルフを覚え始めて先輩に追いつけ、追い越せと重富の

ドームに通いすぎて肋骨にヒビが入り大変痛かったことなど思い出として残っています。

一回勤務するとその職場の動向に注目するようになりますが、昨年の暮、薩摩イモでワイン造りに成功したとの報道を見て大変喜んだ次第です。薩摩イモも資源の一つですが、無尽蔵といわれるシラスや豊富な森林資源など、県内にはさまざまな資源があります。これからもこれらの資源を活用した素晴らしい技術をどんどん開発され、地場産業の振興と発展にご尽力いただくようお願いいたします。

終わりに、工業技術センターが県内企業の技術開発、技術力の向上を支援する中核的な施設として、さらに、バイオテクノロジー、エレクトロニクス、新素材などの先端技術を始め、各分野における工業技術に関する「技術的拠りどころ」として21世紀を目指し益々ご発展されるよう心からご祈念いたします。

【メモ】

平成 3年 4月転出：庶務部長

(平成元年 4月～平成 3年 3月)

平成 3年 4月～：現職

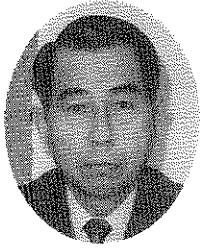
(鹿児島県農協指導監)

現住所：〒892

鹿児島市吉野町826-1

現況：毎年、大輪菊、懸崖菊造りに励んでいます。昨年(平成4年8月)孫の誕生で、おじいちゃんになりました。

祝 創 立 5 周 年



工業技術院九州工業技術試験所
機械金属部長 今川 耕 治

鹿児島県工業技術センターの創立5周年を心からお喜び申し上げます。まさに創設期と位置けられるこの5年間に、今後のセンター発展のためのスプリングの効いた跳躍台が築かれたことと確信しますが、その作業の一部に関わることができたことを誇りに思います。

昭和63年8月1日9時、当時の鎌田知事から所長拝命の辞令を頂き、新設部門などについて説明を受けた後、「工技センターをどうか宜しく」と両手で力強い握手を求められました。その時の暖かい手の温もりを今だに忘れませんが、実はこの瞬間、それまで国研での研究業務しか経験のないまま、不安一杯の私の気持ちが突然ふっきれ、前向きな決意に変わったことを思い出します。

その工技センターの偉容、中の研究施設整備の充実には驚かされましたが、とくに現在でも全国に例を見ないと思われる最新の施設インフラ（自家発電、蓄熱式冷暖房、太陽光発電、水、電気等の集中管理、保安設備等）の設置には、竹盛初代所長をはじめ関係者の先見性、先進性に深く敬意を払うばかりでした。

従って私の視点が、このハードの充実に見合うソフトの拡充強化、即ち研究、指導、サービスを含めたセンターの業務の向上とその抽出に向かうのは必然でした。幸い、よきパートナーの大副所長をはじめスタッフ陣との議論の中から、様々な事業や制度の整備や新設が考えられ、職員の協力のもとで次々と実行に移されました。もちろんこれには、主管の商工労働部など行政部門の理解とバックアップ、それに県内企業団体各位からの支援が大きく働いたと思います。現在は陣内第3

代所長のもとで、さらに強力で業績の向上が図られていることはよく承知しており、誠に心強い限りです。

お陰様で3年2ヶ月の在任期間中は忙しさの中にも楽しく充実して過せました。若い人とのスポーツやのんかたにも精を出しました。この間、公私を問わず様々な形で励ましや活力を与えて頂いた人情味豊かな極めて多くの方々へ改めてお礼申し上げたい気持ちです。

これからのキーワードは“連けい”と“ネットワーク”と思われます。県内の異分野を含めた産学公との連けいはもとより、他県の公や九工試を含めた国研群との広域的研究ネットワークの形成を研究者個人レベルでもしっかり張りめぐらすことをおすすめします。

工技センター各位のご健闘を切に祈ります。

退任辞令を土屋知事から頂いたとき、「ご苦労様でした。」と、やはり暖かなねぎらいの握手を頂いたことを付け加えさせていただきます。

【メモ】

平成 3年 9月転出：所長

(昭和63年 8月～平成 3年 9月)

平成 3年10月～：工技院九州工業技術試験所 機械金属部長

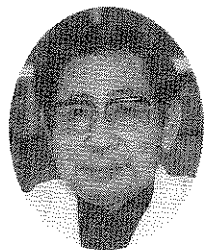
現 住 所：〒841

鳥栖市布津原町11番地

現 況：機構改革、H5スタート地域大プロの準備や日常業務に明け暮れています。

工技センターからの入れ替わりの来訪を心待ちしております。

創設期の思い出



日本澱粉工業株式会社

藺田 徳 幸

21世紀の都市づくりを目指す、国分単人テクノポリス建設事業の中で、技術の拠点として単人の地に、工業試験場、木材工業試験場と機械金属技術指導センターが再編統合して、県工業技術センターが竣工、移転してあっという間に5年の歳月が過ぎ去りました。この節目の年の3月に、私にとりましては36年余りの在任期間を終えることが出来て、感慨無量といったところです。当初から窯業部に所属して、薩摩焼の振興、粘土瓦等県下の窯業関連製造業の振興、シラスの利用開発などを骨格としての研究開発と指導業務に携わって参りましたが、昭和58年度から中小企業庁が地域の技術の高度化を図る目的で創製した、地域フロンティア技術開発事業（3カ年、事業費5億円）で開発テーマとして、透光性アルミナを用いた工芸品の開発と地域資源を利用した多孔質セラミック新製品の開発を産学官が連携し取り組むことになり、部が中心となつて、計画書作り、導入機器の選定、開発研究に明け暮れておりましたが、一方で実用規模でのセラミック製品開発を図るため、いち早く59年10月に現工技センター敷地の上段に県ファイナセラミック製品開発研究所が完成しました。真空炉や高温炉を用いての製品化のため、月に数回出張を繰り返しておりましたが、暮からは工技センターの敷地造成が始まり、小高いシラスの山と地山を客土しながら造成がなされ、着々と建設が進むのを眺めるのが楽しみでした。62年秋、広い山裾と環境を最大限に生かした景観の中に近代的な機能を備えた管理研究棟、実験棟が竣工しましたが、管理棟の壁面にシラススタイルが貼られ、ロ

ビーには白薩摩陶板、薩摩切子の照明具、ファイナセラミック、実験棟の壁面にはシラスガラス繊維補強によるセメント板が採用されたことがなにより嬉しく思いました。開けて祝賀会も済んだ2月末、声が嘎れるので診察を受けたところ喉頭癌ということで声帯を摘出され、2カ月間の療休ののち復職しましたが、当初は電話の応対もままならず、4年間、色々と周囲の方々に迷惑と負担をおかけしましたが、暖かく見守っていただいたことに深く感謝いたしております。創設期の5年間に研究設備は益々拡充され、卓越した研究実績を持つ歴代所長のもとで、中堅、若手の研究員がそれぞれの分野で研究発表、投稿と積極的に参加されていることは心強く、研究成果としても続々と特許の申請もなされていますが、あくまでも中小企業の「技術の拠りどころ」として工業技術センターの役割を踏まえて、前途洋々と発展されることと、皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

【メモ】

平成 4年 3月退職：窯業部長

(昭和62年12月～平成 4年 3月)

平成 4年 4月～ : 日本澱粉工業株式会社
開発研究所 主任研究員

現 住 所：〒892

鹿児島市西千石町16の5

現 況：工技センターに今でも窯業部開放試験室に通勤しております。濾過助材の再利用、微粒シラスパルーンの活用をテーマに若い者に負けずに頑張っています。